

今から 1300 年ほど前のことになります。唐の玄宗皇帝の治世です。西暦では 755 年になりまして天宝 14 年のことです。大唐王朝がまさしく黄金期を迎えたかのように見えました。しかしその年の 11 月 9 日、当時の国家の軍事力の三分の一を握っていた軍人、安禄山(あんろくざん)がいきなり今の北京の辺りから反旗を翻し 15 万の精鋭を率いて 20 万と称して破竹の進撃を始めたわけです。これは 755 年の末のことです。翌年の 6 月には洛陽が陥落されて都・長安の最後の砦であった潼関(とうかん)という要塞も落とされてしまいました。

この玄宗皇帝が若い頃は非常に名君の誉れの高かった彼が慌しく側近達を連れて西へ逃げていきます。豊かな国、蜀(しょく)を目指します。彼の息子が西の方に向かって行きます。そして間もなくその息子がおやじの意思を受けたというわけではなく自ら皇帝の玉座につくのです。つまり大乱の中で新しい国家を作り上げることを目指したということです。

では今日の我々の主人公に戻ります。「杜甫」という詩人。その時に彼は陥落してしまった都の付近にいまして、ひとりでやにわに新しい皇帝のもとに行こうとするのです。国難にあたって役に立ちたいという一心でした。しかし、運悪く途中で反乱軍につかまりまして長安に連行され監禁下におかれます。その翌年の 3 月、これはとても大事なところになりますが、長安に監禁された「杜甫」は美しい春を迎えます。そして都の高みにのぼって一望するのです。その時に彼が生涯の傑作を作りました。「春望」です。「春望」という作品は日本でも特に大戦の終わりには大変愛唱されてきました。特に《国破れて山河あり》という文句は多分皆さん記憶にあるかと思います。ではその作品を見てみましょう。

国破れて 山河(さんが)在(あ)り

城(しろ)春(はる)にして 草木(そうもく)深(ふか)し

時に感じて 花も涙を濺(そそ)ぎ

別れを恨(うら)みて 鳥も心を驚(おどろ)かす

烽火(ほうか) 三月(さんがつ)に連(つら)なり

家書(かしょ) 万金(ばんきん)に抵(あた)る

白頭(はくとう) 搔(か)けば更に短く

渾(す)べて簪(しん)に勝(た)えざらんと欲す

こういうふうには日本語では素晴らしい日本の先人達の誰がこんな読みを作ったのか、私は不思議に思います。立派な外国語ですよ。しかし翻訳なしに読み下しという方法で昔の漢語を全部読めたのです。それは別として、この作品に戻りましょう。

《国破れて 山河在り》

これは悲愴なシンフォニーのように読み起こされています。《国破れて》というのは都が反乱軍に落ちてしまったということなのです。山河は変わっていない。山も河も変わらない。

《城春にして草木深し》というのは一見、景色描写のようにも見えるのですがそうではない。どうしてかという都の住民達が反乱軍に殺されてしまったか、よそへ亡命してしまったか、さもなければ戦々恐々と家の中で姿を隠していたのか。つまり華やいだはずの都が今、賊軍の他に人気が見えない。そのために草も木も茫々と生えてくるのです。その光景を見た「杜甫」は非常に悲しみと憤りを抱いてしまいます。

《時に感じて 花も涙を濺(そそぎ)》

これは皆さん、どなたか別の読み方の記憶はありませんでしょうか。実は日本ではこの読み下しでは《時に感じて 花にも涙を濺(そそぎ)》別れを恨んで鳥にも心をおどろかすというふうになっているのです。どう違うかという《に》が入ると詩人が自ら涙をそそぎ、そして心を驚かしているということなのです。いずれ当然その通りですが。しかし私は詩人の表現はスィートではないと思います。どうしてかという、そもそも花も鳥も人間の感情を知らないはずなのです。しかし感情の知らない花も鳥も悲しくなっているという表現が、戦争の苦難が人間のみではなくて万物に及んでいるという非常に詩的な表現になるわけです。誇張的ではありますが、皆さんいかがでしょうか。この違いがお分かりでしょうか。

《烽火(ほうか) 三月に連なり》

これもちょっとなかなか難しい表現です。日本の学者達のテキストの中で《三月》という表現をサンカゲツと解説する方がいらっしゃいます。それは間違いだと思います。何故か

というところを見ていただきますと、755年11月に戦火が起こりました。そしてこの詩が詠まれたのは757年3月です。つまり戦争が始まって1年4ヶ月経っているのです。3カ月どころではない。では《三月に連なり》というのはどういう表現かということ、昨年の春3月と今年の春3月、これをぶっとおして戦火があがりっぱなしです。それが《烽火(ほうか) 三月連なり》の本当の意味ではないかと私が思うのです。そしてそれに対して

《家書(かしょ) 万金(ばんきん)に抵(あた)る》

戦乱の中でポストマンがいなくなってしまうと、手紙が届かない。一万のお金があっても誰も手紙を届けてくれないのです、ということなのです。しかも杜甫は単身で反乱軍の手に落ちていました。そういうこともあり家族の安否も知らないわけです。そんな憂いを彼は詠っていたわけなのです。

皆さんこの作品はここまでタイトルの「春望」－春の3月に都を一望した。そしてこの「望」という眺める、望む、遠望するという文字にちなんで詩人の視線は、一句目からいくと国、山河、城、草木、鳥、花。更に烽火(ほうか)。烽火(ほうか)とは何か？古代中国では例えば辺境で戦闘が起きたときに、どうやってすぐに都に知らせるか？メールもなく電話もない時代でした。その時に狼の糞を使って砂漠で火を炊く。その狼の糞で炊いた煙は真っ黒です。真っ直ぐに上っていくのです。そして100kmの向こうで衛兵達が、つまり兵隊達がこれを見るとまた炊いておく。次々と炊いていく。そしたら消息がすぐに中央に届いて皇帝がそれなりの命令を繰り出すことができることになっていたのです。烽火(ほうか)という言葉は即ち後世我々にとって戦争の苦難を意味することになるわけです。

最後の二句になります。これもやはり有名な学者がそう言っておりまして。杜甫のこの作品、最初は《国破れて山河在り》－大きなスケールで読み起こします。しかし最後には白頭、つまり白髪、そして簪(しん)－かんざしに戻っていくのです。ですからこれを見て偉い学者がこの作品は竜頭蛇尾だと批判したりするのです。いや、しかし決して実はそうではない。何故かと言えば彼のこの望、国、山河－すべて大きなものをおさめているのです。やがて最後には自分の内心に自分の目をあてていく。

気がつくとは彼は46歳。賊軍に捕らえられていた。気がつくともう白髪早々となっていた。

若かったのですよね、46歳で真っ白になるとは。そしてこの体の衰えは一体どこからきたものなのか。そして簪(しん)－かんざしとどういう関係なのか。中国の男子達は儒教の国なので親孝行が最高の美德です。生まれてからずっと髪を切ってはいけません。ですから男子でも髪を長く肩に。しかし礼儀というものがあって必ず結い上げて上に束ねる。

従って「杜甫」は非常に貧しくて痩せておりました。髭も剃ってはいけません。父母からもらったものですから。ですから46歳でもおじいちゃんのように見えます。そして立身出世をするために文士達が髪を結い上げる。そして冠－これは身分によってモノが違う。貧しい文士だったら竹の筒で作る。竹の中に通していく。お金持ちだったら玉とか金とかで作って、これをどうやって留めるかという簪(かんざし)です。これで留めていくのです。

しっかりと立身出世のために、つまり現代のサラリーマンと同じようにネクタイを締めないと会社に行けない。古代の人達はこれをやらないと官庁には登れないわけです。しかし46歳でまだ無冠であった「杜甫」は、なんと気がつく《白頭(はくとう) 搔(か)けば更に短く》－短いというのは少なくなってきたということです。髪が段々なくなってしまった。そうするとどういうことになるかという、長いだけで数本しかなく、冠に入れてもスルっと。簪(かんざし)を留めようとしても簪(かんざし)が落ちる。ということは、私はもうこの体がこんなに衰えていて、いつか解放されても立身出世ができないのではないかということなのです。この自問です。皆さんいかがですか。46歳、一度も給料をもらったことがない男が、詩人として非常に才能があるんです。本来なら唐の時代では詩人では一番高い位置にいてもおかしくない時代です。文学の大好きな時代でした。しかし彼には何もできない。これで賊軍の中に捕らえられていて、焦りと失望が心の中で渦巻いていた。これはこの作品の締めくくりの真相だと私は思います。

作品の簡単な紹介はこれくらいにして、皆さんには折角ですので今日は30分しか頂いておりません。会長から20分から30分と伝えられました。私が玉蘭さんから昔教わったことがあります、20分～30分と言われたらプラスして50分でいいんだよと。(笑)というような裏技がありまして。今日はこんな技を使うわけにはいきませんので、30分だけはしっ

かりお話をさせていただきたい。

この作品を皆さんもう一回見てください。皆さんのお仕事と全く関係がなくて役に立たないことなのですが、文学というのはそこが尊いのです。役に立ちません。お金になりません。けれども心を豊かにしてくれるのです。ちょっと見てください。

この作品は五言律詩(ごごんりっし)です。五言律詩とは何かというと古代の人は一文字を一言(ごん)といいます。一句は五つの文字で作られているんです。《国破れて山河在り》—五つの文字。律詩というのは厳しい規律の上に成り立つ作品であって、第一の条件は八句あるということです。八つの句がある。一句も多くてはならなくて減ってもいけない。これが最初の条件。そして第二の条件。八つの句がありましてこれは八つの句はそれぞれ建物とを考えていただきたい。そして真ん中の四句、つまり第三、第四、第五、第六句が建物の一番中心となるものであって、つまり大きな柱になるんです。これを作る時に詩人達は必ず対句(ついく)を行なわなくてはならない。これは技巧の話になります。専門用語では「ついじょう」といいます。どういうことかというと、第三句と第四句を横で見てください。《感ずる》という感情動詞ですよね。人間の感情に絡む動詞です。それに対して《恨む》という動詞がきます。これが対になるのです。それで二文字目の《時(とき)》。どういうトキかということ、この下の句の別れざるを得ない戦乱のトキ、悲しいトキということになります。そして更に分かりやすいのは、《花》に対して《鳥》。これが対です。更に《濺(そそぎ)》という動詞に対して《驚かす》という動詞。最後の五文字目、《涙》はどこからくるものだ。目ではなくて《心》からくるもの。これがぴったり対になっているのです。あと律詩を作るためにもうひとつだけお話をしておきたいのです。五文字、五文字作れば、中味が素晴らしければいいというわけではないのです。詩を作るために中国の古代の人達は、詩というのは普通の文章とは違って音声上華麗であって洗練されてなければならない。それで、もうひとつ究極の技巧があり、「平仄(ひょうそく)」といいます。平仄といたら中国の学者でも頭を抱えてしまいますが、平仄とは何かというと、漢字はごまんとあります。しかし全ての漢字は実は全部「せいちょう」を持っています。アクセントを持っている。例えば乱暴な言い方、ごまんとある漢字の中でおよそ3万の漢字は「平(ひょう)」の

グループに属していて、あとの漢字は「仄(そく)」のグループに属している。どう違うか
というと「平(ひょう)」のグループの漢字は発音が高くて長くて平らである。それに対し
て「仄(そく)」は激しくて低くて短い。そして五文字の詩を作るために二文字1回を極め
なければならない。つまり平仄のコウタイです。私の本業は音楽家であって高音と低音の
文字を選択的にもってくる。二文字が高音なら次の二文字は低音。さらに次の文字は高音。
これで抑揚を作っていくのがこの平仄の真骨頂です。つまり古代の文人達が民間人も請わ
れてほとんど千年の歳月を費やして、隋や唐の時代になって漸くこのような技法を作り上
げた。それまでは混沌となってみんな手探りで詩を作っていたのです。この作品を言語で
の朗詠を聞きたい方はいらっしゃいますか？(拍手)ではやりましょう。

ここでちょっと説明します。中国の方が何人もいらっしゃいます。私が今使う中国語は現
代の北京語をもとにした標準語ではないのです。できるだけ唐の時代に近づこうとして自
分なりの研究で。時々発音が標準語と異なることをご了承ください。平仄も韻のことも念
頭においてお聞きください。

当時、「李白」はどうしていたか？実は「杜甫」が賊軍に捕らえられていた時に、「李白」
は唐の皇室の内紛に巻き込まれていて死罪を言い渡されていた。ふたりとも本当に踏んだ
り蹴ったりです。妻と親友達の嘆願によってようやく死罪は免れて結局流罪を課せられて
しまった。翌年の初め頃、彼はゆっくりと江西省、湖北省、四川省とさすらっていくので
す。行く先は本来なら南の果てになります。そこに行かなければならない。彼は15カ月か
けて、ゆっくりと。足取りも心情も重いですから、長江三峡に。長江三峡を登りきって白
帝城という名所のところで思いがけず赦免にあったのです。そして彼はその時に解放され
て山を降りて来た道を舟にかえて一気に下っていく。その時に名作を作られた。唐代沢山
の作品がありますが、最高の七言絶句だといわれているのです。一緒に詠みましょう。

早(つと)に白帝城(はくていじょう)を発(はっ)す

朝(あした)に辞す 白帝(はくてい) 彩雲(さいうん)の間(かん)

千里の江陵(こうりょう) 一日にして還(かえ)る

兩岸(りょうがん)の猿声(えんせい) 啼いて住(とど)まらず

輕舟(けいしゅう) 已(すで)に過(す)ぐ 万重(ばんちょう)の山

この作品は、実は日本で二通りの解説があります。ひとつはこの作品は李白が27歳のとき、初めて故郷から出たときに長江を下ったときに作ったのではないかというんです。もう一つの説は57歳のときに彼が赦免にあつて長江を下ったときに作った詩だというんです。根拠はどこにあるかという二句目の《還る》という字にあるのです。初めて未知の世界に向かった青年が向こうに何があるかも分からないで舟が下っていても《還る》とは言わないのではないか。ですから57歳のときに彼はこの道で上ってきたのです。流刑の道。苦しくて上ってきて、ここで解放されて一気に下っていく。その時に彼は《還る》という字を使って自然なんです。ですからこの作品は解放された彼の心の生き生きとしたところを描写しているわけです。そして何よりも詠む人達の心を捉えているのは自由に対する李白という詩人の渴望です。もう一回自由人として生きられることになります。そして生命。人生に対する熱愛。この作品からほとぼしっているんです。《兩岸の猿声》。三峡下りをなさった方ならお分かりかと思うんです。しかし三峡は今ダムで完全に変わってしまって我々とても心を痛めていた。昔、私は3回も下りました。兩岸の絶壁、200メートルくらい高くて舟は中を通っていく。兩岸は猿達が走りながらキャアキャアと啼いていた。中国の古典文学の中で猿の啼き声がどうしても悲しげに聞こえるんです。どうしてかという。実はこのような逸話があります。ある軍人が進軍のときに戯れに小猿をペットのようにつかまえてしまった。そしたら彼らの舟が下っているときに絶壁に母猿がずっと追いかけてギャアギャア啼きながら追いかけてくる。数日も変わらず我が子を探すために。とうとう彼らが止まって休んだときに母猿が下りてきて、力果てて死んでしまった。死んだら軍の軍規がありまして解剖してみようと。どうして死んだのか母猿を解剖してみたら、なんとハラワタが全部切れていた。これが「断腸の思い」というのです。「断腸の思い」とはこういうことなんです。悲しくてハラワタが切れてしまった。それから中国人が聞こえてくる

猿の啼き声は全て悲しげに響く。しかし李白のこの作品の中にはその悲しさは感じられない。代わりに《輕舟》という言葉。軽い舟というのは早いということなのです。一日千里も行くような早さ。あの長江の流れが激しいのでそれに乗っかって下っていくというよ
うな作品なのです。

ここでもう一度この作品を読みたいと思います。(拍手) それでは最後に「早(つと)に白帝城(はくていじょう)を発(はっ)す」を原語で詠わせていただきます。

どうもありがとうございます。

<閉会点鐘：黒岩会長>

先生、本当に気合の入った、そして学問と知恵と勇気をまとめていただいたような「卓話」でございました。やっぱり詩には心があるのですね。私もそういうことを感じながら、あと2週間くらいで終わってしまうのですけどね。でもこんな気合の入った挨拶など私はやったこともありませんし、なかなか出来るものではないと思います。中国には四千年の歴史があるといえますから、もっともっとこれに勝る詩や歌があると思います。時折ご指導いただければ私達の背筋に物差しが入っていくのかなと思います。しかしいいですね、中国の方は。素晴らしいと思います。さて別件ですが、私の母が去る2月に亡くなったのですが、皆さんに沢山の香典をいただきまして、香典返しをどうしようかと思っていましたが、10年くらい前に、先輩ロータリアンがニコニコボックスに入れられたのを思い出し、ここで私が10万円をニコニコすると宮代会長エレクトを追い越しかねませんので、今日はその半分の5万円だけ香典返しということでニコニコさせていただきました。それでは皆さんに感謝申し上げまして第58回目の例会を終了させていただきたいと思います。